〝題〟の草子―『枕草子』―

坪　美奈子

《一》「標題文芸」としての『枕草子』

日本文学史上、最初の随筆作品という位置づけがなされている『枕草子』は、極めてユニークな形態を有するものとして、一千年前の日本、平安文化の爛熟期である一条朝に出現した。

作品中、地名その他の名称（ものの名）やできごと等を列挙した、いわゆる「もの尽くし」の章段は、この作品を特徴づける表現形態として、よく知られたところである。

「山は」「峰は」「原は」「市は」……という〝題〟を提示して、モノに与えられたさまざまな名が集められ、また関連する何かしらのできごと、逸話等が差し挟まれてもいる。多く、〈感情語彙〉によって成る「すさまじきもの」「にくきもの」「心ときめきするもの」「うつくしきもの」などの章段も、「～もの」という定型の〝題〟を提示して、そこには、人の世のさまざまな事象がすくい取られてきている。

時代やジャンルを越えて、〝題〟を有する作品の、あるいは〝題〟そのものの表現的意義を捉えていこうとする「標題文芸」研究の試みは、〝題〟（そして〝題〟のもとに集められてきた各「項目」）の集積である『枕草子』という作品についても、その読解研究の地平に新たな可能性を拓くものと言えよう。

『枕草子』の伝存する最も古い写本は、書写年代が鎌倉中期を下らないとされる孤本「前田家本枕草子」である。四つに冊を分けて伝わるこの本は、各章段の題の形態と、またその内容とによって、見事に作品を四分類した体裁を有している。いわゆる類纂形態の伝本である。しかし、私たちになじみ深い『枕草子』の形は、内容が整然と分類整理されたこの類纂形態のものではなく、「～は」型・「～もの」型のいわゆる類聚的章段、それから日記的章段、随想的章段と呼ばれるところの各種の章段が入り交じって一書を成した体の、雑纂形態のものである。

研究史的には、分類整理された類纂の形が作者のオリジナルであるとする説と、渾然としたありさまの雑纂の形こそが本来的なものであるとする説と、両説並行して未だ決着を見ない。能因本と三巻本という二大系統の伝本が存し、広く厚い享受史に支えられて今に読み継がれている雑纂形態のほうが、作品の形としては、現代の享受者にも受け入れられ易いものと言えよう。しかしまた別の視点から、今見るような雑纂の形を〈ゆるやかな類纂〉(注1)として捉えることも可能なのである。

類纂形態の前田家本、そして雑纂形態の伝本である能因本系統の本でもその基本的な形として、「は」型・「もの」型の類聚的章段の書き出し、すなわち題詞は、以下に続く項目・文章と明瞭に区別して、一行に一つ、次のような形でまさしく〝題〟として掲げられている。

山は
　をくら山　かせやま　みかさやま　このくれやま　いりたちの山
　わすれすやま　するの松山　ひえのやま

かたさりやまこそたれに所をきけるにかとおかしけれ
まゆみのやま　いつはたやま　かへるやま　のちせのやま　ひらのやま
（以下略）
みねは
ゆつるはのみね　いやたかのみね　あみたのみね
（前田家本『枕草子』「はるはあけほの」の冊・六～七丁）
山は
おくら山　みかさ山　このくれ山　わすれ山　いりたち山　かせ山
ひえの山　かさとり山こそはいかならむとをかしけれ　いつはた山　のち瀬山　かさとり山　ひらの山（以下略）
みねは
つるはの嶺　あみたの峯　いやたかの峯
（三条西家旧蔵本『枕草子』上冊・一二丁）

能因本系統の三条西家旧蔵本において、こうした題と本文の改行の形は主に前半部のもので、必ずしも全編にわたって統一されたものではない。だが改行しない場合でも、〃題〃のあとにはほとんど必ず数文字分の空白が設けられていて、章段の〃題〃の形は明確であると言える。

例えば、校本や現行注釈書の類にこのような伝本の形は反映されないのであるが、編集上の見出し項目として、各章段の冒頭語は、「目次」に用いられ、またそれぞれの章段本文の「見出し」に用いられてきた。なお、雑纂形態の伝本でも類纂形態の伝本でも、日記的章段や随想的章段の冒頭表現がこのように一行に独立して切り出されることはない。各種の章段が入り交じる雑纂形態の伝本で、日記的章段や随想的章段が数段連続する場合、章段ごとにいちいち改行されることはなく、ほとんどの場合、直前の章段の末行に入れ込む形で続けて次の段が書き継がれていく。

こうした類聚的章段の〃題〃の掲げられ方の特色に鑑みても、「標題文芸」としての『枕草子』について考えていくことは意義のあることと思われる。むろん、伝存写本の形について、これをそのまま作者オリジナルの構想を伝えたものと見なすことはできない。しかし、〃題〃を提示する形によって、この作品は日本初の新しい文学ジャンル―随筆ジャンル―を切り拓いた、ということはあるいは言えるかもしれない。特に、能因本系統の三条西家旧蔵本では、二冊に分かれたその両方の巻頭に「巻目録次第」として、各冊に収められている「は」型・「もの」型類聚章段の題詞が列挙されており、興味深い。

清少納言枕草子巻目録次第
山　峯　原　市　淵　海　みさゝき　渡　家　すさましき物　たゆまるゝ物　人にあなつらるゝ物　にくき物　こゝろときめきする物　すきにしかた恋しき物　こゝろゆく物　のいとすくなくみえたる物（注2）　木の花　池　せち　木　鳥　あてなるもの　虫　にけなき物　たき　はし（以下略）
（三条西家旧蔵本『枕草子』上冊・一丁）

『枕草子』という作品享受の手がかり・拠り所として、内容の面でも形態の面でも、類聚的章段の〃題〃が機能してきたことを物語るものであろう。

論者としては、端的なひとこと、ないし一句によって成る題詞を持たず、雑纂形態の伝本において〈独立〉した形を取らない日記的章段や随

想的章段でも実は、類聚的章段に準じて、冒頭の表現には〃題〃にふさわしい資格が付与されているものとみている。内容や形式、また時系列や因果関係によって分類・整理・排列されない（雑纂形態の伝本による）この作品の各章段は、それぞれに〃題〃を提示して始まり、固有の《主題》を有し、互いに独立して、また共鳴し合って、作品中に存在しているのである。

本稿では、特徴的な〃題〃を提示して語り出す『枕草子』独特の章段形態に注目し、この作品を新しく「標題文芸」の一つとして積極的に捉え、考察していくことになる。しかし、これは「〃標題〃についていかに定義するか」という、初めに定義ありき、で開始される試みではない。『枕草子』を「標題文芸」として捉えてみたとき（それは相田満氏を代表とする本プロジェクトの打ち出した新たな技術でもあり、既存の―「標題文芸」たる―「類書」との関係を探ってきた、『枕草子』研究史上最も古い課題の一つでもある）、そこから先は、今度は眼前の『枕草子』の形や内容の分析・読解によって、「標題なるもの」の本質（ありよう）を見定めていくという作業になるのである。「標題とは何であるか」という命題に対する解答の一つは、『枕草子』を資料とすることによって導き出されることになるであろう。

そして今、一連の考察を経た結果として、論者は、『枕草子』における「標題」とはつまり《主題性》を有するものであり（これも「主題的標題」と言えようか）、その「主題」とは、内容の読解に伴ってそれぞれの章段の構成によって深められ、発展していくものであると考えるのである。

先に〃題〃の形式について述べたときに、まず能因本と前田家本とを挙げたが、三巻本の〃題〃の掲げ方については、他の本と同じ次元で論じられないところがある。その「は」型章段の〃題〃は、「もの」型と異なって改行されず、〈独立〉した形をとらないのであるが――基本的に「は」型の題詞と章段本文（項目）の間には空白を置くが、全く空けずに続ける場合もある――、章段ごとに改行される形式であり、題詞は常に行頭に掲げられる。三巻本の場合、その一類本が初段から七十段以上を欠いた状態であるため、本文の様式については一層論じにくくもなる。失われた部分についての想定も、にわかにはなし難い。しかし、『枕草子』を象徴する型式とも言えるであろう「は」型章段の〃題〃の形をめぐって、三巻本本文から受ける印象と能因本本文から受ける印象の違いは大きいと言える。能因本の基本の形は〃題〃を〃題〃として明示するものである。堺本の題の形式はまた諸本によって異なる状態である。『枕草子』研究において、〃題〃の掲げられ方という、本文の形式に関わる問題は、従来手つかずの、顧慮されることのなかった部分である。

作品の〈内容〉が本文の〈形式〉といかに関わり、それが諸系統本にいかに現出してくるかということは興味深い問題である。題の形態に注目するところから、この作品の本質とまた享受の様相について調査・研究していくことを、今後も継続的に、諸本比較上の新たな課題としたいと考えている。とは言え、身を不用意に興味の坩堝に投じてはならないだろう。これは、石橋を叩くがごとき慎重さをもって臨むべき課題なのである。この研究は、能因本・三巻本・前田家本・堺本という四系統本相互の、あるいはまた内部の複雑な関係について解明していくための新たな視点とはなるはずである。

能因本の〃題〃の形にもまた特記して注目すべき個性が存している。

すなわち、前掲のごとく、この本の示す基本の形として、類聚的章段の〃題〃は一行分中、行頭から二、三文字下げたあたりに記されるのであり、行頭の位置に〃題〃を記す前田家本や、また三巻本の形と比べて、能因本の冒頭語のこの位置は、その〃題〃としての意義のゆるぎなさを物語るものになるであろう。三条西家旧蔵本に対するもう一つの能因本系古写本完本である富岡家旧蔵本の場合、類聚的章段の題詞については、全編を通し、本文と独立して一行に一つ、行頭から数文字下がった位置に掲げられる形が基本となる。〈能因本的〉特徴が顕現化した様態と言えようか。

《二》類聚的章段の主題と構成について

『枕草子』という作品の内部では、さまざまな表現の形態が選ばれ、試されている。前節にも述べたごとく、それらは従来、日記的章段、類聚的章段、随想的章段の三つに大別して考えられ、各種の形態はまた相互に関係し合ってもいる。類聚的章段には、そしてつまりその題詞には、「は」型と「もの」型の二種がある。「もの」型に分類される章段には、例外的に「〜をり（折）」「〜こと」等の題詞を持つものも存する。

『枕草子』の類聚的章段では、章段の題詞が提示された後、その発端には多くまずこの題と結び付き、一般的にも納得され易い項目が選択され、配置される傾向がある。例えば前節に掲出した「山は」という章段であれば、まず、有名な「歌枕」たる「小倉山」や「三笠山」が並べられることとなる。伝本による異同等も踏まえた上で、作品の一つの手法として指摘できよう。そして順次、人の意表を突く意外性のある項目なども交えながら展開していき、全文を通してやがて独自の結論に導いていくのである。

今、新しく、「標題文芸」としての『枕草子』について考えていくとき、やはり初めに、類聚的章段の形を見るべきであろう。本稿では以下、「もの」型章段について見ていく。「もの」型章段の読みをめぐり、論者は、冒頭に掲げられた題詞について、その意味を深めていく読み方が可能であろうと考えている。提示されている題詞は、ほかでもない、その章段の「主題」なのだと考える。それは、「〜なものとは何であるか」という「問い」として捉えることもできるであろう。ここで「標題」とは、章段を読み深めていって得られた「答え」を導く、最初の「問い」でもあったのだと考えている。章段を読むという行為は、「問い」の「答え」を探り、「主題」の本質に迫っていくことにほかならない。そのとき、「問い」に対する「答え」は、作者の側に既に用意されているとみる（また、次節に述べるごとく、初段「春はあけぼの」の場合は、その冒頭語に端的に「答え」が示されていたのだとみる）。

〔一〕「過ぎにし方恋しきもの」の段の手法

例えば、「**過ぎに方恋しきもの**」（三〇段）という章段がある（段数の表示は、小学館刊行『日本古典文学全集　枕草子』による）。懐かしい昔のそのよすがとなるものを一つまた一つ拾い上げて綴る、ひとひらの詩のようなごく短い章段である。題詞「**過ぎにし方恋しきもの**」のもとに挙げられている項目は、能因本の場合、①雛遊びの調度　②をりかうし　③二藍、葡萄染などのさいでの押しへされて、草子の中にありけるを見つけたる　④あはれなりし人の文、雨などの降りてつれづれなる日、

さがし出でたる　⑤枯れたる葵　⑥去年の蝙蝠　⑦月の明かき夜　である。従来は、心の赴くまま、例の連想によって自由気ままに書き付けられた文章として受け止められてきているが、論者は本章段の読解を通し、類聚的章段における主題や構成、またモチーフについて考究する手がかりが得られるものとみている(注3)。

まず、⑤「枯れたる葵」の項についてであるが、ただ「賀茂祭の名残」という解釈から一歩を進めて、その祭の折のできごとと、また和歌的表現に鑑みれば、これが〈過去の恋〉を想起させるものとして解されることに気づくのである。葵（―逢ふ日）にこと寄せ恋の歌を詠み合う祭が過ぎ、やがてその葉が枯れるということには、男女の「離れ」、すなわち恋人との別れが暗示されているとみられるのである。

項目の排列等に諸本間で異同があり、「枯れたる葵」は、三巻本本文で第一項目に位置している。この「枯れたる葵」の項は、「雛遊び」（＝幼な恋）、「をりかうし」（「折厚紙」か。三巻本本文になし）や「さいで」が挟まってうち忘れられていた「草子」（＝恋物語の草子）、「あはれなりし人の文」（＝恋文）、「去年の蝙蝠」（＝去年の恋のよすが）と、幼女期から少女期を経て成人期、そしてつい去年の夏のことと、人生の各段階・時期における女性の恋のよすがが並べられていた〈章段構造のモチーフ〉を解き明かす項目と言えよう。「枯れたる葵」の項自体は、章段モチーフとしての〈過去の恋〉を暗示するものであると同時に、擬似的な恋（雛遊び）や物語の虚構の恋を卒業し、実際に「あはれ」深い恋文を得、現実の恋を知った成人期の女性の、別れの体験を象徴する景物としても玩味し得る。

特に前掲の能因本の項目排列によって本章段を鑑賞するとき、読者は、遠く幼女期の記憶から去年のできごとまで、掲げられている項目を追いながら女性の恋の記憶をたどることになる。そしてその時読者は、自らの来し方をしみじみと思う気持ちにいざなわれているのである……。「**過ぎにし方恋しきもの**」とは、その時読者が体感している、《往時を懐かしむ人の心》そのものだったのである。ままごと遊びの道具につけ、昔の恋文につけ、過去のできごとを思い出してしみじみと恋うる、その心こそが「**過ぎにし方恋しきもの**」の本質にほかならない。《往時を懐かしむ人間の心情》を主題とする本章段においては、遠い過去から去年に至るまで、時系列によって項目を排列する構成が選択されて、効果を挙げているとみられる。だが、章段のモチーフを解き明かす、章段読解の鍵たる「枯れたる葵」を第一項目に置く三巻本の本文によっても、章段の主題性については認められてよいものであり、かつ十分に感取し得るものと言ってよいであろう。

〔二〕「項目」のはたらきと章段の主題

「もの」型類聚章段の題詞の多くは〈感情語彙〉によって成るが、章段中には、読者の感情・感覚に訴えて効果を発揮する言わば感覚喚起の項目が仕掛けられているとみる。類聚的章段の手法について考えるとき、主題や構成の問題と関わって注目される事柄である。それは例えば、「**すさまじきもの**」（二二段）における「火おこさぬ火桶、地火炉」や、「**心ゆくもの**」（三一段）における「夜寝起きて飲む水」などである。

また、異なる複数の章段に共通して挙げられている項目も、それぞれの章段構成の中で、作者の用意した「答え」に読者を導くためのある効果を発揮するものと思われる。例えば、「**すさまじきもの**」（二二段）と

「**つれづれなるもの**」（一四二段）の両段に「除目に司得ぬ人の家」の項が挙げられている。前者では場面が詳細に語られ、後者では項目のみの形（第三項「除目に司得ぬ人の家。」）であるが、〈任官のなかった者の家の様子〉を想起することが、両段においてそれぞれ、人が感じる「すさまじき」心情、そしてまた「つれづれなる」心情について、読者があらためて思考する手がかりになるのである。また例えば「**むつかしげなるもの**」（一五九段）や「**ないがしろなるもの**」（二三二段）における、それぞれ「縫ひ物の裏」、「唐絵の革の帯の裏」などは、〈ものの裏側〉のイメージないしそれを見た時の感覚を喚起し、「むつかしげなる」、また「ないがしろなる」心情をまず感覚的に悟らせる働きをする。と同時に、「むつかしげ」な、「ないがしろ」なものごとの持つ要素を感取させる効果も担わされているだろう。「**つれづれなるもの**」（一四二段）と連続する「**つれづれなぐさむもの**」（一四三段）では、少ない項目の中で（一四二段は項目数四件。一四三段は六件）、「物忌」と「双六」が両段に共通する素材として挙げられている。同じ素材を用いて、全く異なる、正反対であるはずの二つの心情について考えさせる手法がとられている。

つれづれなるもの　所さりたる物忌。馬おりぬ双六。除目に司得ぬ人の家。雨うち降りたるは、ましてつれづれなり。

つれづれなぐさむもの　物語。碁、双六。三つ四つばかりなるちごの、物をかしう言ふ。また、いと小さきちごの物語したるが、ゑなどいふ事したる。くだ物。男のうちさるがひ、物よく言ふが来たるに、物忌なれど、入れつかし。

人にとって「碁、双六」は「**つれづれなぐさむもの**」であるが、「**つれづれなるもの**」に「所さりたる物忌」「馬おりぬ双六」を挙げ、「所さりたる」すなわち場所柄がおもしろくない物忌や、「馬おりぬ」すなわち展開がない双六であれば、それこそ最も「つれづれなる」ものともなり得る事実を示してみせている。「**つれづれなるもの**」の〈正体〉は、挙げられている素材の本質ではなく、そのように感じる人の心の働きそのものなのであり、一つの言葉で表される感情を形作っているさまざまな要素が、各項目を通して明らかになっていく仕組みである。

題詞として掲げた感情語彙の一つをめぐって章段中に挙げられた各項目が、その題詞以外の感情語彙の言葉を評言として結ばれている例も多く、これも題詞の意味を深める――問いの答えを探る、章段の主題を見出す――ための手法と言えよう。例えば、「**とくゆかしきもの**」（一六三）の段中では「ゆかし」の語は用いられず、「聞かまほし」が三度繰り返されている。

とくゆかしきもの　巻染、むら濃、くくり物など染めたる。人の子生みたる、男女とく聞かまほし。よき人はさらなり。えせ物、下衆の際だに聞かまほし。除目のまだつとめて、かならず知る人のさるべきなどがなきをりも、聞かまほし。思ふ人のおこせたる文。

また、この次段は「**心もとなきもの**」（一六四）を題詞に掲げるが、挙げられた項目（条）の一つ一つは、「心もとなし」のほかにもさまざまな感情語彙を伴って、章段を読む者の感情を誘導し、「心もとなき」心情の複雑なありようと本質とを悟らせる。「あなたをまもらへたる心ち」（第二項目）、「わびしう、おりてもいぬべき心ち」（第五項目）、「いと心もとなし」（第七項目）、「にくささへ添ひぬ」（第八項目）、「いとくちをし」「わびしけれ」（第九項目）、「いと心もとなく、うち捨ててもい

ぬべき心ちぞする」（第十一項目）、「いと久し」（第十二項目。第十項目は「子生みたる人の、後の事久しき。」）、「いと心もとなし」（第十三項目）、「いみじう心もとなけれ」（第十四項目）。縫製・染色などの場面、また同じ〈出産〉をめぐって、前段「とくゆかし」く感じる場合とは異なる感情的要素が顕現化されてくる。**「とくゆかしきもの」**における巻染め・むら濃・くくり染め（第一項目）は、未知の結果に期待を寄せ楽しむものであるが、一方の**「心もとなきもの」**における〈人に託した急ぎの縫い物〉の場合はそうはいかない。出産の報告を待つ場合でも、切実さにおいて、「ゆかし」さを超える感情が「心もとなき」感情なのである。**「心もとなきもの」**はいわゆるマイナス感情の語による題詞の一つであるが、プラス感情の語**「とくゆかしきもの」**と並べ、また共通の素材を用いながら、両者の相違を浮き彫りにしてみせている。「心もとなき」感情とは、「ゆかし」と感じる場合のようにもはや鷹揚に悠長に構えてはいられぬ、切実で余裕のない感情、つまりより当事者的な感覚にほかならない。両段にはまた、〈恋人からの文〉という素材も共通して現れている。**「とくゆかしきもの」**には「思ふ人のおこせたる文」が挙がるが、**「心もとなきもの」**では〈遠方の恋人からの文〉、「遠き所より思ふ人の文」を受け取り、「かたく封じたる続飯（そくひ）など放ちあくる、心もとな」い心情が挙げられている。同じ〈恋人からの文〉であっても、そこに「ゆかし」と感じていたときの余裕は一切ない。

章段中に挙げられている項目そのものがそれぞれに「〜なるもの」の「答え」なのではなく、一つ一つの項目は、「〜なるもの」について探っていくための、手がかりなのではないか。「もの」型類聚章段における題詞と項目との関係は、類書の見出し項目と列挙された事物、辞書の見出し項目とその解説などという関係とは本質的に異なるものであろうと思われるのである。名称列挙の歌枕集におけるモノと名の関係ともそれはおそらく全く異なるものなのである。

「あてなるもの」を挙げる――高貴なものについて問う――一段（四九）に提示された「人事」項目は、全六項目のうちただ一つである。

あてなるもの　薄色に白襲の汗衫。削り氷の甘葛に入りて、あたらしき鋺に入れたる。梅の花に雪の降りたる。いみじううつくしきちごのいちご食ひたる。かりのこの割りたるも。水晶の数珠。

第一項目の「薄色に白襲の汗衫」をはじめ、ここに「あてなる」事物として挙がるものに共通する要素として、光の透過・透明感があろう。唯一の人事は、苺を無心に食う子どものまことに無邪気なしぐさである。作者がここに提示する**「あてなるもの」**の本質とは、身分の高さや上品な態度・振る舞いなどではなく、つまり人為や作為ではない、無心さであり、また絶妙のバランスでもあるということになろうか。それは第五項目の殻を割った卵のさまにも象徴的に捉え得るところかもしれない。

現在伝わっている雑纂形態の『枕草子』において、**「ことことなるもの」**（四）の段は類聚的章段の筆頭に位置する（三巻本〈二類〉「同じことなれども聞き耳ことなるもの」四段）。

ことことなるもの　法師のことば。男女のことば。下衆のことばに、かならず文字あましたる。

〈言葉が異なるもの〉……とは、法師、男女、下衆（の言葉）である、というのであるが、人の用いる言葉というものは単一でなく実に多様なものであり、立場、性別、身分などによって大きく異なるものなのである。すなわち、それぞれの人とともに生きて異なるものが言葉であると

いうことになろう。「**ことことなるもの**」（言異なるもの）という題詞は、実は言葉の本質を象徴し、またそれを問うものとして掲げられていよう。――それを言わば「座の文芸」たるもののように見なし、類聚的章段の成立について、「～なもの」をめぐり、集まった女房たちが口々に思うところを述べ、それを清少納言が筆録・整理したものであるなどという従来の見方は、遺憾ながら、『枕草子』の本文と、夾雑する何物もなく直と向き合う読解から導き出されたものとは言えまい（注4）。

『枕草子』の類聚的章段の題詞こそは、まさしく主題を示す標題として掲げられたものなのであって、読者は、その主題を過たず探っていかなければならないのである。我々、この「草子」を手にする千年後の読者にも、ともに思考することが求められているのだ。読者は、章段中に挙がる種々の項目を通し、「～（な）もの」について体感しながら、やがてより深い《意味》に向かっていざなわれていく。「すさまじきもの」「ありがたきもの」「にくきもの」等等、人生の側面を浮き彫りにする『枕草子』の「もの」型類聚章段であるが、個々の章段の主題は、常に、複数の項目の集積たる全文の構成によって示されているのだ。

しかし従来的な解釈は、各項目の語義をもってそれが清少納言の思う「～（な）もの」なのである、とするものであった。我々は読者としてそこで思考を止めることなく、各項目のはたらきと全文の構成によって語られている「～（な）もの」の本質に迫っていかねばならないのである。各項目が担う役割に思いを致すことなく、章段の論理を踏まえずにある項目を打ち消してみたり、逆に新たに加えたりしていくような態度もまた、この作品の解釈研究とは結び付かないものである。

類聚的章段のもう一つの形である「は」型章段についても、主題と構成の関係が見定められなければならない。「は」型類聚章段の読解を通して、我々は「もの」に与えられた「名」（固有名詞）を手がかりに、その「もの」の本質、また、その「もの」と人との関わりについて発見していくことになるであろう。歌枕としていつしか記号化してしまった名ではなく、我々はそのように名づけられてきた「もの」、……山、峰、原、市、淵、海等等、あらゆる「もの」、そのものと向き合い、これを見つめ直すことになる。さまざまな名を手がかりに、「もの」そのものについて考えをめぐらすことになるのである。『枕草子』の「は」型類聚章段に「所在未詳」の非和歌的地名が多く集められているのも、ただ単に「おもしろい名前への興味」などといったことからではなかろう。

「もの」とその「名」をめぐって「もの」の本質――「もの」と人との関わり――に迫り、解き明かしていくという、このようなことを成し得たのも、『枕草子』という作品の新しさなのである。「命名」行為の文芸的独創性に注目し、名とモノの不可分の結び付きを今新たな手がかりとして始発したのが「標題文芸」研究の試みである。その対象としてまさにふさわしい作品の一つが、この『枕草子』であると言えよう。

《三》初段からみる『枕草子』の〝題〟

春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

このように書き出される『枕草子』の初段はあまりにも有名である。従来は、この短く言い切っただけの「春はあけぼの」という表現をめぐ

って、「春はあけぼのをかし」を略した言い方であると説明されている。しかし、『枕草子』の初段、作品の序文に位置する本章段に繰り返されている「春はあけぼの」「夏は夜」「秋は夕暮れ」「冬はつとめて」という独特の形には、実は、〃題〃を提示して展開する、「標題文芸」たる『枕草子』の本領ともいうべきものが示されていたのではないだろうか。

さて、「春はあけぼの」に始まるこの『枕草子』初段は、新しい詩であるとも言えようか。「あけぼの」「夜」「夕暮」「つとめて」という日々繰り返されるそれぞれの「とき」が、「春」「夏」「秋」「冬」というさらに大きな「とき」のうちに配され、あるいはそれを支配し、時刻と季節と、この二つの「とき」が融合して織りなす、独特の立体構造による時空間が創造されている。新しい作品世界の始発に、独特の手法によって表現された〃時空間〃が掲げられていることにはあらためて注目すべきであろう。

各条冒頭の表現は、「春はあけぼのがよい」などと補って考えられているが、逆に、〃あけぼの〃という瞬間が殊に美しいのは「春」であるというニュアンスも感じ取りたいのである。〃夜〃が〃夜〃として最もおもしろく感じられるのは「夏」の〃夜〃であり、〃夕暮〃は「秋」があわれで、おもしろい。〃早朝（つとめて）〃らしい雰囲気が最も鮮烈に感じられるのは「冬」である……と。それはしかし、「春はあけぼの。」「夏は夜。」と最も凝縮した形で表現される以外にないのである。

提示された時刻と季節の組み合わせ自体は、和歌や漢詩の世界でも称揚されてきたものであるが、この初段の世界では時刻や景物が主体となってその個性を際立たせてくる。そして全ての中心は、知覚し感動する人の心である。

この構造の意味するところに素早く読者を導くには、冒頭「春」については、「曙」という和文脈には未だ膾炙されていない新鮮な言葉（『蜻蛉日記』に一例見える）を用いるのが効果的であった。最終条の「冬」では特に人事に言い及び、「…わろし」で結ばれる形には、以下、さまざまに展開していく興味深い内容が暗示されるかのようである。

初段「春はあけぼの」、「ころは」、「正月一日は」までの並びは、冒頭に四季、また天象・歳時を置く和漢の類書、詩歌集の形にも関係するようであるが、作者は、『枕草子』の序章として、作品の巻頭に独特の世界観を打ち出した。その初段以下に展開していく全てのことは、切れ切れの断片としてはじめて意味を保ち得るというようなものではないのである（注5）。永遠に続いていく「とき」の流れの一瞬一瞬をつかみ取り、そこに我が生を刻み込んで生きる人びとが紡ぎ出すかけがえのない「とき」こそ、『枕草子』が包み込んで千年後の今に伝える世界なのである。――続いて物語世界では、紫式部が理想郷として四季曼荼羅、四方四季の六条院世界を創造したが、その構想時点において紫の上の好む「春の曙」が特記されていた。

清少納言が『枕草子』の冒頭に掲げた「春はあけぼの」とは、まさしくそのままの形でこそ、歌語的な「春の曙」とも、また「春はあけぼのをかし」と補った散文形のものとも、全く異なる《意味》を持つものであろう。それは、すなわち、『枕草子』が、新しい作品形態の鍵として用いた〃題〃のありさまではなかったか。

論者は、『枕草子』の各章段とは、まず〃題〃を提示して展開し、以下に続く部分によってその主題性が深められていく構造を有するものであると考えている。〃題〃（冒頭語）が「問いかけ」であるとすれば、作

者の側にそれに対する「答え」は既に用意されているのであり、類聚的章段の場合であれば、読者は、冒頭語以下に挙げられている一つ一つの項目をたどりながら、自身でその「答え」を探ってゆき、それぞれ自らその「答え」を、発見することになるのであることは前にも述べた。

特に、作品冒頭、初段の、

《春》は、《あけぼの》。

という言い方は、『枕草子』における〝題〟というものに、対応する独自の主題（「答え」）があることを明確に示すものではなかっただろうか。そして、季節の美の本質である時刻、「あけぼの」「夜」「夕暮れ」「早朝」それぞれの美しさが、続く各条文部分において見事に描き出されているのである。すなわち、『枕草子』初段の本質は、季節美の称揚ではなく、まさに「春はあけぼの。」という形に示される、季節美の本質を提示し、全文を通してそこに独自の世界観を提示することであると考える。

「春」というものは、つまり「曙」という「とき」のうちに象徴されるものであり、その「とき」とは、ほかでもない、それを全身で体感する私たちの、この命が刻んでいく、かけがえのないものなのである……と。

《四》書名『枕草子』をめぐって

さてこの作品は、書名の由来をめぐって従来考えられてきたように、例えば「歌枕」の収集を目的として始発したようなものではないのである。「何を書くべきか」という定子の問いに対する、清少納言の、「全く新しいものを書く」という答えが、つまり「枕草子」なのであった。清少納言は、眼前の草子を「枕」にする（枕にこそはしはべらめ）、と答えたのである。当時、分厚い草子をさして比喩的に言った「枕草子（マクラソウシ）」という語を利用して、清少納言は、書くべき内容を答えず（つまり限定せず）、未知の作品の名を「〜草子」として答えたことにもなる。まだ見ぬ作品の題は「枕草子（枕の草子）」と決まった。「枕」にする、と言って清少納言が頂戴することになった「枕」の草子である。その瞬間が、作品の新しさと特徴を謳いあげた、いわゆる跋文中に描きとどめられている。

宮の御前に、内の大臣の奉りたまへりし御草子を、「これに何を書かまし」と、「うへの御前には史記といふ文をなむ書かせたまへる」とのたまはせしを、「枕にこそはしはべらめ」と申ししかば、「さは得よ」とて給はせたりしを、……

もともと分厚い草子をさして言う「枕草子（マクラソウシ）」という語の「枕」は言うまでもなく寝具の枕であり、眼前のまだ何も書き付けられていない草子を今すぐ使える「枕」として表現したこの清少納言の秀句は、まず「願わくはそれを頂いて…」という意味のものともなるのである。

即座の下賜は、書くべきものを答えたからではなく、それを今すぐそのまま使えるものとして、すなわち「枕」と表現してはじめてなされたことなのである。下問に対して、「全く新しいものを書く」という含意ある応答でなかったら、この即座の下賜は行われなかったであろうと論者はみている(注6)。

さて、清少納言がこれから生み出し、完成させるべき未知なる作品のその名は『枕草子』と決まった。そして彼女は、その名にふさわしく、「枕」

を手がかりとする作品の形態を案出したのである。そのとき「枕」とはつまり「題」であり、それをめぐってさまざまな表現を生み出し、深め、発展させていく中心の言葉である。『枕草子』とは、いま誤解を恐れず大胆に申すなら、「〃題〃の草子」として解し得る書名であるかもしれない。そして題―標題―とは、この作品において単なる〈見出し項目〉ではなく、作品の（個々の章段の）主題であり、それは作者から読者への問いであった。その問いには答えが用意されていて、それは作品（章段）内容の読解とともに探り当てられていく仕組みになっている。各項目は、章段の題詞―標題―のもと、無造作に集められてきたものなどではなかったのである。

『枕草子』の各章段において「標題」はつまり主題であって、主題は作品を通して深められ、発展していくものにほかならない。作品題号をめぐる従来の考え方は、跋文に描かれた主従のやり取りにおける「枕」を、まず意義の上で直接「歌枕」や「枕詞」と結び付けてしまうものであった。言うまでもないが、即座の下賜を導く秀句としての「枕」は、その時点で短絡的に「題」に結び付いたり、あるいは予定調和的に「題」を意味したりしたものではない。その時それが既に「題の」（枕の）草子である必然性はないのである。

『枕草子』は、既存の類書等の模倣に始まった作品ではなかったのである。類書と『枕草子』の共通点を数え挙げ、類似性を探ることも、ある普遍的な問題に関わって決して意味のないこととは思われない。しかし、随筆文学の魁として新しいジャンルを切り拓いた『枕草子』の構造と本質は、積み重ねられてきた類書との詳細な比較研究によってでも、ついに解明されないものであるに違いない。

「標題文芸」としての『枕草子』をめぐって考察していくことには、『枕草子』という作品題号の意義と、この作品を特徴づけているところの類聚的章段の構造及び意図、この二つの問題について、それぞれ密接に結び付いたものとして追求・解明していく可能性が存していると考える。そのとき、題号命名のいきさつを『枕草子』独特の―清少納言の本領が見事に発揮された―表現として読み取ることが必要であろう。

一千年前、一条朝という時代背景の中で、極めて独自の個性を発揮した『枕草子』という作品。この作品の題号と形態及び内容にまつわる多くの謎が、「枕」という語を中心に据えつつ初めて一筋に繋がったものとして論じられるのではないだろうか。

《五》標題の異同をめぐって―「もの」型類聚章段の題詞―

『枕草子』の類聚的章段の特に題詞について、四系統諸本間の本文異同を見ていくとき、論者は、題詞―標題―と章段内容の関係、さらには伝本どうしの関係について考察する新たな手がかりが得られるのではないかと考えている。「標題文芸」としての『枕草子』を考察することの有効性の一つである。

今、幾つかの「もの」型類聚章段について、題詞部分の校本を示す。

凡例

三巻本（一類本の欠く範囲、用例の①～③は、二類本・弥富破摩雄旧蔵本。以降は一類本・陽明文庫蔵本（甲本））

底本 - 能因本（三条西家旧蔵本）
前田家本
堺本（高野辰之旧蔵本）

①「ことことなるもの」（四段）
三　おなし　なれともきゝみゝこと
能　・・・こと・・・・・・・・・・／＼なるもの
前　物・
堺　おなし　なれともきゝみゝこと　物・

②「にくきもの、乳母の男こそあれ」（二六段）
三　かしこき　・・・　は　をとゝ
能　・・・・・・にくき・物・めのとの男・・こそあれ
前　は　をとこゝ
堺　さたまりて　おとこ（章段本文終わり）

③「過ぎにし方恋しきもの」（三〇段）
三　すき　かた
能　・・・・・・過・にし方・恋・しき物
前　すき　かたこひ
堺　みるにつけてすきぬるかたこひ

④「はるかなるもの」（一一一段）
三
能　・・はるかなるもの
前　物・
堺　行末　物・

⑤「絵にかきておとるもの」（一一九段）
三　かき・お　りす
能　絵に書・てをと・・る物
前　・・かき・　りす
堺　ゑにかき　お

⑥「かきまさりするもの」（一二〇段）
三
能　・・かきまさりするもの
前　ゑに
堺　ゑ・・　物・

⑦「とりどころなきもの」（一四四段）
三　もの
能　・・・・・・・・・・・とり所なき物・
前
堺　いひしらすいふかひなく　もの

⑧「おそろしげなるもの」（一五〇段）
三　を
能　・・・おそろしけなる物
前
堺　みるに

⑨「いみじく心づきなきものは」（一二五段）
三　う　・
能　いみしく心つきなきものは
前（この段なし。類似の文は、前田家本「心つきなき物」の段の最終条にみえる）
堺（この段なし。類似の文は、堺本「心つきなき物」の段の最終条にみえる）

⑩「心づきなきもの」（三〇六段）

三（この段なし。類似の文は、三巻本「いみじう心つきなき物」の段後半の一条としてみえる）

能　・・・・心つきなき物

前

堺

まず①「ことことなるもの」の例であるが、能因本及び前田家本における章段題詞「ことことなるもの」に対し、三巻本及び堺本ではこれに「おなしことなれともききみみことなるもの」と、言葉が加わった状態である。他本に対する堺本本文の注釈的傾向は、題詞の比較の上でも顕著と言えよう。右に挙げたところで見れば、①のほか、②「さたまりてにくき物めのとのおとこ」　③「みるにつけてすきぬるかたこひしき物」　④「行末はるかなる物」　⑦「いひしらすいふかひなくとり所なきもの」　⑧「みるにおそろしけなる物」という状況である。

作品（章段）の「標題」自体が伝本によって相違し、そこに各本の個性が見出されてくるというこうしたことも、『枕草子』という作品の一つの特徴と言えるかもしれない。同じ章段内容に対して、標題に違いが見られるのはなぜであろうか。また、章段本文にも違いがある場合は、それぞれ、標題と本文内容の関係にはどのような論理が存しているのであろうか。

さて、①「ことことなるもの」の段については本稿第二節でも触れたところであるが（章段全文を掲出）、実は「こと」の語をめぐり、解釈が定まっていないのである。例えば、能因本底本の『日本古典文学全集』本（松尾聰・永井和子校注・訳　小学館　一九七四年）は「異異なる」と解し、「別々なもの」と訳すが、同書の頭注にも触れるとおり、従来「言異なる」「異言なる」「異事なる」などとも考えられている。しかし、挙げられている項目が全て「ことば」であり、その異なり（相違）は「法師」「男女」「下衆」によるものであることが本文上に明らかであるとき、「ことことなるもの」とはつまり「言異なるもの」（言葉が異なるもの）と解してよいものなのではないだろうか。「言葉が異なるもの」とは、すなわち、法師（の言葉）、男女（の言葉）、下衆（の言葉）である……ということである。「題詞」と個々の項目の結び付きの確かさ、そして「題詞」と章段全体の意味の結び付きの確かさ、このいずれをも十分に生かす読解が追求されていかねばなるまい。

「言異なる」の例は『土佐日記』に見える。

唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月のかげは同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

阿部仲麻呂の有名な詠歌「天の原ふりさけ見れば…」（『古今集』羇旅）の歌を改変した形での引用があって印象的な場面である。言葉の違いを超えて通じ合う人の心がテーマとなっている。『枕草子』の本章段で「言異なるもの」という題詞は、人と言葉との関係について解き明かすものではなかろうか。

一方、三巻本底本の『新編日本古典文学全集』本（松尾聰・永井和子校注・訳　小学館　一九九七年）では「同じこと（事）なれども聞き耳こと（異）なるもの」と解し、「同じ内容にはちがいないが、聞いた感じが違うもの」と訳している。こうした、能因本の特に解しにくい部分において、三巻本の章段題詞が堺本と一致していることには注意する必要があろう。「は」型の例になるが、「木の花は」の段があってまた「木は」の段がある能因本及び前田家本に対し、三巻本及び堺本では両段の題詞

が「木の花は」と「花の木ならぬは」という形であることも現象として興味深いところである。さらに、堺本で他系統本の「草は」に相当する題詞は「花なき草は」である。

ほかに、⑤の例で能因本及び堺本が「絵（ゑ）に書（かき）てを（お）とる物」、三巻本が「絵にかきおとりする物」であるところ、前田家本は「かきをとりする物」である。「絵に」の部分を欠いた状態であるが、⑥の例で前田家本は「ゑにかきまさりするもの」となっている。前田家本の二つの段の排列は他系統本の排列と逆転した状態であり、「ゑにかきまさりするもの」「かきをとりする物」の順で並ぶ。章段の排列と題詞本文の異同が関係している例とみる。堺本では、両段とも題詞に「ゑ」の語が入る。

一層複雑な問題にはなるが、能因本及び前田家本には「にくきもの」（二五段）から続いて展開していく連続した章段群が存している。それぞれの段は分類上はいわゆる随想的章段とされるもので、②の「にくき物めのとの男こそあれ」（二六段）、さらに「文ことはなめき人こそいとゝにくけれ」（二七段）、「あかつきにかへる人の」（二八段）と並ぶ。②について、四系統中、三巻本のみ「かしこきものは」という冒頭語を持つ章段として作品中に存する。章段内容には能因本と類似の部分も含まれるが、その大半が三巻本の独自本文である。三つの段はみな「にくきもの」の段とは〈無関係〉な位置に収められている。また、「あかつきにかへる人の」の段で男の無粋を難じて用いられる「にくし」という評言が、三巻本にのみ見当たらない。能因本及び前田家本では「にくしとは世の常、いと愛嬌なし」という容赦ない物言いもあるところなのだが、題詞が、章段全体の意味合い、《主題》の問題にまで関わって相違する例と言えよう。

また、能因本には⑨の「いみしく心つきなきものは」（一二五）という章段と、⑩の「心つきなき物」（三〇六）の章段がある。前者は類聚ではなく、随想の一段で「～ものは」として始められている。内容的にそれぞれ独立した章段であるが、前田家本・堺本では「心つきなきもの」、三巻本では「いみしう心つきなきもの」の題詞のもと、一段に〈統合〉された形である。能因本「いみしく心つきなきものは」（一二五）の段は、実は「文ことはなめき人こそいとゝにくけれ」（二七）の段の最終条と〈重複〉している。この〈重複〉の現象は能因本的特徴の一つとも言えようが、あるいはそこから、章段の生成や章段どうしの相関関係について知る手がかりが得られるかもしれない。能因本の本文は、重層的な読解研究の歴史を経ぬまま現在ほとんど読まれなくなってしまった状態であるが、今回、章段の題詞と本文内容の関わりに鑑みて、そのままの形で十分読み解き得る論理も見定められてくるように思う。作品中の漢籍摂取の表現をめぐり、論者は、三巻本の原典主義的傾向に対し、能因本の韜晦的表現に、より柔軟で女性的な表現としての引用の論理が存することを見出している（注7）。

以上、ここでは用例数を限った提示となったが、伝本間の本文異同は、章段内容におけるばかりでなく、章段の題詞――標題――そのものにも見られるのである。この現象は、類聚的章段の題詞が、例えば辞書的な（自明で固定的な）見出し項目ではなく、内容の読解とともにその意義が探られていく性質のものであることを示し、その事実と深く関わっているのではないだろうか。複数の項目・条によって構成された章段の《意味》が明確にならないとき、端的な形で掲げられている章段題詞の《意

味》も、しかしまた、明らかにはなり得ないのである。享受の過程でそこに新たな言葉が加わる可能性も存する。同時に、ある標題（章段題詞）のもと、本文に新たな項目が加わることもあろう。標題自体の増殖も起り得よう。類纂形態の前田家本と堺本は〈類聚〉への関心が強い伝本と言えるが、「もの」型類聚章段の標題語彙は、堺本とそして三巻本において増加する傾向がある。堺本は注釈的な特徴を有する伝本であるが、この本はまた複数箇所に独自の本文内容を有して注目される。標題を手がかり（目印）に、複数の章段が統合・整理された跡も見出されてくる。

「標題文芸」として『枕草子』を捉える新しい視点と試みとによって見定められてくる事柄は少なくないと確信している。しかしこれは一千年の時を経て伝わった作品の、その内容と形態の関係を問題とする非常に難しい領域に踏み込んでいく研究でもある。章段本文の一言一句に寄り添う読解研究を拠り所に、安直に陥ることを厳に戒めつつ、今後もこの新視点からの研究を深化発展させていきたいと考えている。

本稿では、『枕草子』をめぐって「標題なるもの」のありようについて探ってきた。作品の「標題」＝作品題号にも、各章段の「標題」＝章段題詞にも、そしてもちろん章段そのものにも、かけがえのない《意味》が存していたのである。ここで考察の対象とした類聚的章段に限らず、日記的章段からも随想的章段からも、我々はその《意味》を過たず読み取っていかねばならない。『枕草子』という作品は、読解研究の対象として、その主題性が軽んじられてきた作品でもある。「標題文芸」研究の視座から、この作品について今、新たな評価がもたらされることになるであろう。

〔注〕

1　いわゆる「類聚的雑纂説」というものが存する。田中重太郎氏『枕冊子本文の研究』（初音書房　一九六〇）に「枕冊子の一『原形』は、一見雑纂型であり、実は大きな類纂型であつた」（二四七頁）と述べる。

2　この「のいとすくなくみえたる」という言葉は、三条西家旧蔵本の本文中に〃題〃の形を取って残されているものであるが、その本文内容は不明である。なおこの「巻目録」に挙がる「は」型章段の題詞（名詞部分）のほとんどは本文上でも明確に〃題〃の形式をとるもので、いわゆる「は」型章段の題詞の全てが挙げられているわけではない。また、実際の章段題詞と目録の表現が異なっている場合もある。

3　本章段の解釈をめぐっては、拙著『新しい枕草子論―主題・手法 そして本文―』（新典社　二〇〇四）で詳しく述べた。

4　例えば石田穣二氏は、類聚的章段の形式について「基本的には遊戯の一形式、従ってそれは、基本的には多人数の参加、協力という前提なくしては考えられない性格のものであろう。こういう形式の生まれた母胎は、具体的には、清少納言の属した、定子に仕える女房集団を措いてほかには考えられない。こうした形式が清少納言の独創にかかるといった仮定はまず無理であって、はじめに形式があったと考えなくてはならない。」（『（角川日本古典文庫）　新版　枕草子　上』一九七九、解説・四二五頁）と述べている。この新しい作品創出の営為が、まず定子後宮というかけがえのない場を得てこそのものであったことには相違ないが、従来のこうした「形式」先行の考え方によっては、この作品の形と内容の問題は解明されず、循環論を抜け出し得ないこ

とになるのではないかと思う。

5　「定子後宮の凋落の歴史」を読みの前提に据えてきた従来の『枕草子』研究においては、この作品の「短章段型式」の意味は、悲劇的・非理想的現実に背を向けんがための「意味の空洞化」として捉えられてきたのである。「枕草子の文章は現実にひたすら目をつぶって、刹那の感動・直感に現実を越え時間を越えたものを希求する文章なのである」（三田村雅子「枕草子における〈題〉と〈時間〉―年中行事をめぐって―」〈「日本文学」26-11　一九七七・十一、後に同氏『枕草子　表現の論理』有精堂　一九九五　に収録）。

6　作品題号についての新しい解釈は、前掲、注3拙著で論じた。

7　前掲、注3拙著。